

## 第7章 発掘成果のまとめ

### 第1節 集落と貝層の形成

#### 1 遺跡形成過程と集落・貝層の形成期間

加曽利貝塚出土の土器を網羅的に見たことにより、初めて活動の痕が残された時期が明らかになった。加曽利貝塚における本格的な集落と堤状貝層の形成以前には、東傾斜面東南部北東端の比較的平坦な突出部を中心に早期から中期前葉の土器を検出した。ここでは早期の炉穴と前期と思われる住居跡も検出しているが、遺物量も少ないことから中期前葉までは短期間のキャンプ的な利用が繰り返される程度であっただろう。

複数の住居からなる集落としての利用が始まったのは阿玉台Ⅱ式頃と思われ、東傾斜面東南部のやや平坦な辺りから南貝塚・北貝塚を含む広い範囲に広がっていて、特に北貝塚の範囲に高密度であったと思われるが、ほとんどが時期決定資料を特定できないため、北貝塚の堤状貝層の形成開始期(勝坂・阿玉台末/加曽利EⅠ式古)と連続しているかどうか判断できない。

加曽利EⅠ式からⅡ式にかけて北貝塚の堤状貝層が形成され、この間の集落は当初北貝塚堤状貝層の内側に集中していたが、加曽利EⅡ式からⅢ式にかけて東傾斜面東南部や西外縁部・北外縁部へも広がりを見せ、確実ではないが南貝塚も集落範囲に含まれていたであろう。加曽利EⅢ式期では、住居の集中する範囲が東傾斜面東南部に移っていた可能性もあり、東傾斜面と西外縁部では小規模な遺構内貝層の形成があったから、加曽利EⅢ式期に北貝塚の堤状貝層の形成が続いていたかの確認が重要となる。加曽利EⅣ式期から称名寺式期にかけては、西外縁部を含む広い範囲に住居が散在する状況が想定される。

堀之内1式期に北貝塚北東側開口部と南貝塚に住居が集中すると思われ、北貝塚では開口部を塞ぐように貝層を形成し、南貝塚も堤状貝層の形成がはじまる。堀之内2式の、特に中段階では住居構築・貝層形成ともに低調で、これまで調査の及んでいない範囲に集落の中心的な位置が移動した可能性を考えなければならぬ。加曽利B1式～加曽利B3式にかけては南貝塚を中心に集落が営まれ、北貝塚も部分的に住居を構築している。南貝塚北東側開口部に近い東傾斜面北東部も明らかに集落の一部であった。この間は南貝塚の堤状貝層形成が最も顕著な期間でもある。

曾谷式期の遺構は確認できないため集落の様子は不明だが、土器が北貝塚・南貝塚・東傾斜面東南部に特に集中することなく分布することから、遺跡全体の利用が加曽利B3式期から変化していることは確実であり、堤状貝層の形成も行われなかったと思われる。一転して安行1式期には、土器の分布から南貝塚の堤内縁部を中心とする集落のあり方に回帰したと思われ、安行3b式期まで踏襲されるだろう。堤状貝層の形成は、安行1式期に僅かに行われた可能性があるが、今後の検証を必要としている。遺構内に形成される小規模な貝層は安行1式以降も続くが、11区に確認されたという安行3b式期の貝層が遺構内の形成か、堤状貝層の内縁に積み上げられたものか判断できず、今後にもむけた大きな課題である。

安行3c式・前浦1式期の遺構は確認できないが、土器は堤内縁の分布を踏襲し、数える程の安行3d式・前浦2式の破片を最後に、加曽利貝塚における生活痕跡は途絶える。

#### 2 貝層の特徴

##### (1) 中期の堤状貝層

中期の大型貝塚のなかで、台地上に貝層を高く積み上げた集落として、加曽利貝塚以外で候補として市川市姥山貝塚、千葉市荒屋敷貝塚、同草刈場貝塚、木更津市祇園貝塚などを挙げることができる。この時

期の大型貝塚の多くは、集落の周囲の斜面や谷頭に貝層を形成するものであり、台地上に及ぶ場合でも貝層形成は薄い。加曾利貝塚は、貝類を活発に利用し、それを環状に積み上げるといった伝統の一番古いもののひとつであったと考えられる。後期以降関東の広域に展開する周囲を土手状に盛り上げ、中央に窪地をもつタイプの集落形成の先駆けということもできる。

## (2) 貝層中の住居と焚火跡

遺構の記録としては捉えられていないが古くから注意されているものである。昭和 11(1936)年、大山史前学研究所による調査(大山柏ほか 1937)では、貝層上の住居を調査し「一部は環状上に住居したものと見ねばならない」と指摘している。第 1 次調査 2 区で検出した「上層住居跡」や、第 2 次調査・南貝塚Ⅱトレンチ 1 区の 70 号住居(旧 9 号、位置不明)も、貝層中の住居であったとみられる。

昭和 9 年の大宮守誠らによる発掘では、貝層中の焚火跡を 4 か所検出(大宮 1937)、第 2 次・南貝塚のトレンチ調査でも多くの貝層中の炉跡を検出している(庄司 1969)。さらに、「貝層を掘りとった堅穴の断面らしきものが無数に認められ、その側壁の上面が貝層中にあると見るべきものが少なくなかった」(清水 1976)という指摘もある。

加曾利 B 式期以降の住居跡が少ない理由は、こうした貝層中や包含層中に構築されたものが多かったことによる可能性が高い。この時期の住居跡が把握しにくいのは貝塚に限らない。むしろ、貝層をもつことによって、トレンチ調査の断面でそうした存在が把握できたのであり、50 年前に加曾利貝塚の調査で指摘された当該時期の居住形態や集落の規模にかかる重要な問題が、未解決のまま残されている。

## (3) 遺構内貝層

堤状貝層の下で検出した遺構は、覆土中にも貝層を形成するものが多い。また、東傾斜面東南部の住居群や、南外縁部の北半、南貝塚の開口部に近接する部分の土坑群にも貝層を形成しているものが多い(5-1 ~4 図)。中期と後期の大型貝塚形跡の間にあたる加曾利 E 式後半期の遺構でも、貝層形成率が高く、貝層内に骨が入っているものが多いのが特徴である。

貝層の規模が大きだけでなく、このように貝層の形成単位が多いことは、分析・研究を進める上で大きな利点である。

## 第 2 節 堅穴住居跡と集落を巡る問題

本書で扱った調査で検出した縄文時代の堅穴住居跡は 138 軒に及ぶが、その多くが狭いトレンチで部分的に調査したものであり、帰属時期の根拠を示すことができた例は少なく、住居であるかどうかも判断が難しいものが多かった。また勝坂・阿玉台式期から晩期の前半にかけて集落が営まれていたことは確実といえるが、集落を構成する堅穴住居跡や貯蔵穴などの土坑・墓などの分布の変遷を時間軸に沿って描くには調査範囲が狭小に過ぎ、主に貝層が形作る南北の堤状の景観が形成されてきた過程も推測するには不確かな材料しか得られていない。また遺物の分布状況などから導きうる機能的な「場」の検討も今後期待する点が多いのが現状である。

以下には堤状貝層を含む加曾利貝塚集落の理解にむけて、主に堅穴住居跡を中心にいくつか時期を選んで検討する。可能な範囲で、各時期の堅穴住居跡の地域的なありかたの概観を添えておく。

### (1) 勝坂・阿玉台式期の住居跡の地域差と 29 号住居跡

縄文時代中期の中頃、勝坂式土器と阿玉台式土器が関東地方の東西に分布域を異にしているように、特徴の異なる堅穴住居跡がそれぞれの土器の分布圏に重なるように分布している。阿玉台式土器の地域の堅穴住居跡は、平面形は円形基調と方形基調に別れ、長短比がほぼ 1:1 の場合と 3:2 程度のものがあり、

円形・方形・楕円形・長方形が認められる。支柱穴は1口を中央に配置する場合、数口を一行に配置する場合、4口以上を極端に狭い間隔で二行に配置する場合がありますが、方形・円形の場合は中央1口、長方形・楕円形の場合は数口を一行か二行にする配置が多い傾向にある。基本的に炉の構築は行わない。勝坂式土器の地域の竪穴住居跡は、平面形は円形基調で隅丸多角形と表現すべきものもある。長短比は1:1に近いものから4:3程度のものが多い。支柱穴は規模に応じた増減があるが、4口～6口が主で、基本的に平面形に沿った多角形に配置して囲む空間を広く取る。中央よりやや奥壁によって炉を設け、埋甕炉や石囲炉とする場合が多い。

加曾利貝塚の阿玉台式期と思われる住居跡の検出例は少なくないが、全形の判明するのは98・107号住のみで、いずれも楕円形の平面形で中央に1口の柱穴を持つものである。他に20号住が支柱穴の数と配置を確定できないものの方形の平面形と思われ、阿玉台式土器の地域に属する標準的なあり方であったと推測できよう。しかし勝坂・阿玉台式期末と思われる29号住は、支柱穴4口を方形に配置してその内側に埋甕炉を持つ明らかな勝坂式土器の地域の住居跡であり、異系統と判断できるものである。持ち運び可能な遺物とは異なり、異系統住居の存在は住居を構築する上での約束事を熟知した人間が居住していたことを示すと考えられることから、こうした住居が分布する西関東あるいは中部地方からの移住者があったと評価できる。現在の知見の限りでは、北貝塚の堤状貝層の構築開始は29号住に近接した「C貝層」と考えられ、その出土土器中に、東関東としては豊富な勝坂式土器が含まれていることも極めて興味深い点である。更に29号住には144～147号の4体の人骨が埋葬されていたという事実も注目され、血縁関係の検討のために、将来的には形質や遺伝的な分析も望まれる。

## (2) 加曾利EⅢ式期竪穴住居跡の多様性

加曾利EⅠ式期には、勝坂式土器の地域の住居構造を継承した住居跡が、阿玉台式土器の分布していた地域にも広がって、住居跡に見られた地域差が解消に向かうが、主に阿玉台式土器の後半から加曾利EⅠ式期にかけて東関東に見られる、「有段竪穴遺構」と呼称された住居跡の一類型(加曾利貝塚では検出していない)の変遷から、阿玉台式土器圏の住居跡が勝坂式土器圏の住居跡の構造に近づくよう変化し、加曾利EⅡ式期には、阿玉台式期以来の地域独自の構造が姿を消すと考えられることから、東関東では二つの系統が共存する期間があったと考えられる(菅谷 2004)。加曾利貝塚でも53・54号住に典型的な加曾利EⅠ式期の特徴を確認でき、加曾利EⅡ式期では同様の構造を維持しつつ炉の位置が中央に寄る80・103号住が認められることから、東関東での住居の変遷と異なるところはないようである。加曾利EⅢ式期には小規模な柱穴数口が明確な配置として認めがたい101号や102号住のようなものと、106号や111号住のように、より小規模な柱穴らしきピットが多数検出される貧弱な構造の住居跡が多数を占めると考えられていた。近年幾つかの遺跡で支柱穴と呼んで良いしっかりとした柱穴数口を整然と配置した例が知られるようになり、加曾利貝塚でも出入口側2口と奥壁側1口の支柱穴が壁に接して配置される100号住や4口の支柱穴を方形に配置する135号住がある。また5口の支柱穴を逆五角形に配置する4号住は西関東方面に例の多いものである。加曾利EⅠ式期に地域性が一端解消され、構造上の原則に明確な地域差があるわけではないので、4号住を即座に異系統とすることはできないが、千葉県での遺跡の調査例に照らせば加曾利貝塚の加曾利EⅢ式期の住居跡に多様な類型を見いだせる点に注目したい。

## (3) 「柄鏡形住居」の出現と伝統的住居(加曾利EⅣ式期～称名寺式期)

加曾利EⅢ式期から加曾利EⅣ式期にかけて、円形の主体部と長く張り出す出入口部を持った「柄鏡形住居」と呼ばれる新たな住居が出現する。伝播を受けた地域の多くでは、続く後期～晩期の住居跡の大半が「柄鏡形住居」から変化していくと目されることから、その成立時期と地域の追求が課題とされてきた。

現在のところ長野県千曲川中流域での検出が最も時期的に古いことから、同地域で成立した可能性が高いと考えられるが、西関東から東関東へと徐々に分布を広げ、千葉県域の東葛地域には加曽利EⅣ式期に到達する。いずれの地域でも伝播当初は伝統的な住居跡で構成される集落の片隅に、単独で場所を占めるといった状況が普通であった。称名寺式期には千葉県域でも「柄鏡形住居」的な出入口部が張り出す住居跡が普通となり、主体部平面形や壁柱穴の並びが整然としたものでないなど、地域伝統の加曽利EⅢ・EⅣ式期の住居跡との折衷的な要素が見られるものが少なくないが、堀之内1式期には多数の壁柱穴がほぼ等間隔に巡る整然とした形に統一されるようである。

加曽利貝塚の称名寺式期の住居跡は、133号住が加曽利EⅢ式期の135号住のような支柱穴を整然と配置するもの、134号住が同じく111号住のような壁から僅かにはなれて小規模な柱穴が巡るもので、「柄鏡形住居」的な要素が認められない。一方張り出す出入口部を持つ「柄鏡形住居」と思われる113号住は出土土器を確定できないが、トレンチ出土土器からすれば称名寺式期の可能性が高く、加曽利貝塚でも称名寺式期の内に「柄鏡形住居」が存在したと思われるが、現時点では加曽利EⅢ式期の伝統を受け継いだ住居跡が優勢な状態と評価できる点に興味深く、加曽利貝塚の集落(加曽利EⅣ式期の住居跡として特徴を検討できる加曽利貝塚の資料が無い場合評価は今後改める可能性がある)が、千葉県内の同時期の集落と比較してより伝統的・保守的であったのではないかと思わせるのである。

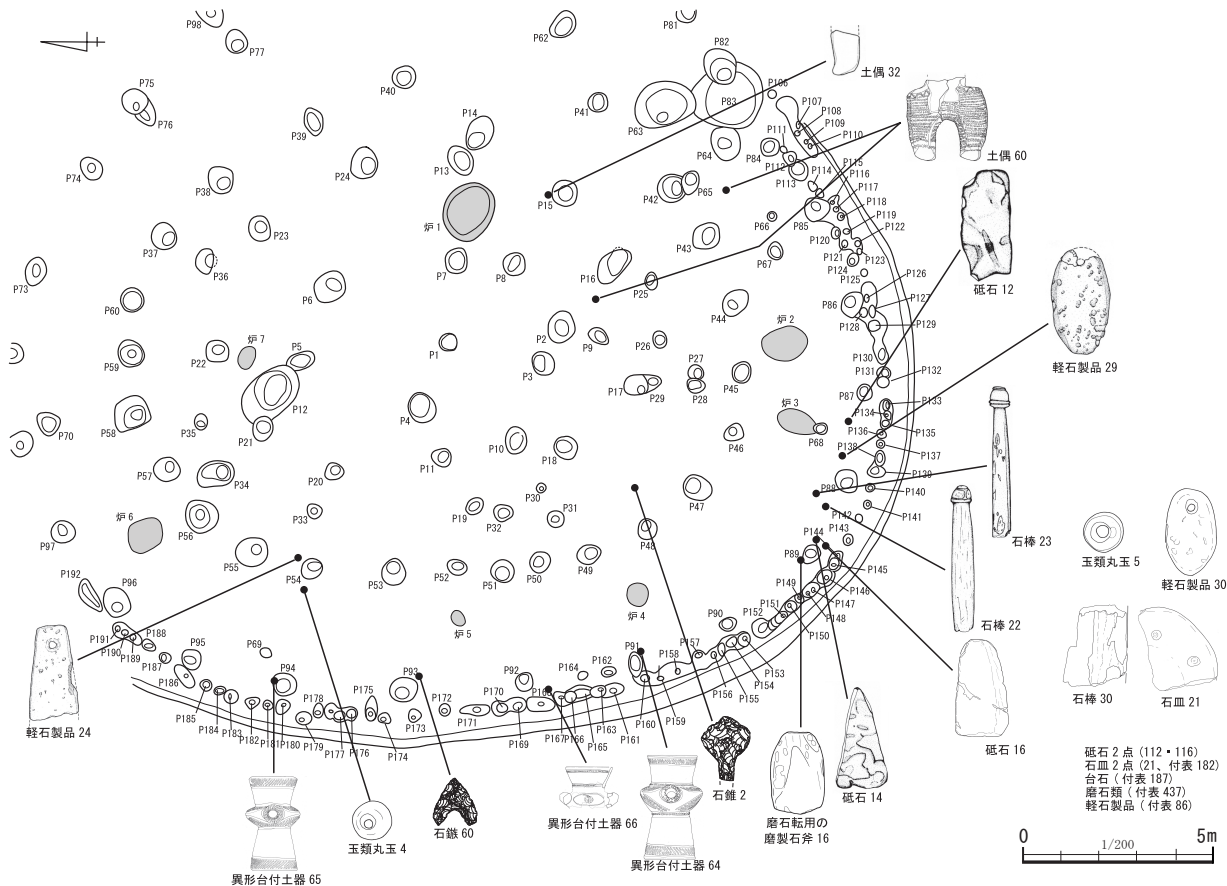
#### (4)112号住居跡と未報告遺構2・テラス状遺構の評価(加曽利B式期)

東傾斜面北東部に位置する112号住は、約19m×16mという非常に大規模な遺構である。『紀要8』の概報に際して飯塚博和が「発見当初は既知の遺構に比べてあまりにも大きすぎるので、あるいは、直径5m前後の住居址などの遺構が複合しているのかとも考えた」が「床面上の覆土が均質であり、遺構相互の切り合いなどの痕跡はまったく認められなかった。したがって単一の竪穴遺構であることを、一種の驚嘆をもって確認したのである」とした調査経過に、当時としては全く常識外れで大規模な遺構を調査した、困惑と驚きが表現されていて、逆にこれ以前には、通念に囚われて同種の遺構が見逃されていた可能性も大いに考えられる。『紀要8』刊行以来、これに近い規模の遺構の検出が続いていることからすれば、概報の果たした役割はきわめて大きかったと言って良いだろう。

「特殊遺構」として報告した後藤和民は「この加曽利貝塚という一つの集落においても、あるいは周辺の集落にとっても、特殊な存在であり、特殊な機能をもっていたと思われる。」とし、以来関東地方の縄文時代後期を代表する祭祀的性格を持った施設として扱われてきた。

阿部芳郎(2001)は「関東地方の縄文後期中葉から晩期中葉のいくつかの集落」で発見された「竪穴住居址に比較して、きわめて大形の竪穴構造の家屋」の機能を推測するにあたって、112号住の「炉址と小さな焼土址の位置関係」と「床面から出土した遺物の種類や位置から推定される個々の場の機能についての類推」から、「中央部の大形の炉(中央炉)を取り囲むようにして、壁際周辺に周縁炉を中心とした祭祀ブロックとでも呼ぶべき空間が、あたかも連座するように配置される必要性が、この施設が竪穴住居とは異なった道筋をたどって巨大化する要因の1つであり、異形台付土器や石棒をとまなう周縁炉は、2～5つ程度の集団の共同の祭祀の場として機能し、さらに周縁炉の数も建替回数に基本的には比例して増加している点でも、共同祭祀の執行を目的とした恒久的な施設であった」とし、こうした「大形建物址は、ある特定のムラにおいてのみ構築された可能性が高い」と、後藤の考えを更に発展させている。

今回、調査原図と出土遺物を検討した結果、帰属時期は本書で示して来た編年での加曽利B3式古段階に位置付けられること、概報において示されなかった小規模な炉が更に1基存在すること、比較的炉に近接した6本による支柱穴配置も想定しうる(ただし平面形から想定される軸と支柱穴配置から想定される



7-1 図 112号住居跡の遺物分布

軸が一致しないこと、遺物出土状況(7-1 図)に若干の修正が必要なことが新たに指摘できるが、遺構の特殊性を更に強調する、付け加えるべき事実は見いだせなかった。

一方で、『紀要8』で「同じような急斜面をテラス状にならしてその上に構築された特殊遺構」とされ、(青沼 2000)では「段丘平坦面から、基盤をテラス状に削り出し、規則的に柱を配した遺構」で「炉が設けられ、石棒・ヒスイ製大珠が出土している」とされた、112号住居跡の南東に隣接する「テラス状遺構」は、調査図面を検討した結果、『報告Ⅳ』・『紀要8』・『県史』いずれの記述とも整合せず、112号住居跡類似の遺構が存在したとすれば「テラス状遺構」の東側の「やはり段状に削り取られている」とされた部分(『報告Ⅳ』)の記載は人為的な削平と認識していることが判るが、「テラス状遺構」の一部とも別遺構ともとれる記載となっている)以外あり得ない。すくなくとも東傾斜面北東部を縄文時代後期中葉に祭祀的性格を持った大規模な施設の構築をくりかえした地点と位置付けて、加曽利貝塚の後期集落を評価するのは尚早である。阿部(2001)が「かりに沖積地から台地上のムラに上る道が存在したならば大形建物址の位置は、まさにその威容が訪問者の視界に占地している」とするのは南貝塚の北東側開口部の性格を考える上で魅力的な推論である。「道」の存在を確認するために、どの範囲を何に留意して調査すべきか検討しておく必要がある。

今回2次調査Iトレンチ土層断面図と土器の出土状況の検討から浮上した未報告遺構2は、112号住居跡に先行する加曽利B1式期に、匹敵する規模の遺構が南貝塚の堤状貝層の範囲に構築されていた可能性を示しているのだから、112号住居跡の機能や性格の解釈を進める上でも、再調査による解明が望まれる。

#### (5)未報告遺構1・5と晩期前半の集落

先述の未報告遺構2と共に、おそらく本書で初めて存在を指摘した未報告遺構1・5は、『報告Ⅱ』掲載の土層断面図にも自然地形とは認めがたい状態で記録されているが、調査日誌に何ら記述されていない

ことからすれば、当時の「常識」が遺構と認識させることを阻んだのだと忖度する。いずれも安行3b式前後の遺構と思われるので、加曾利貝塚の集落がどう終末を迎えるのか探る上で重要なことは論を待たない。他遺跡の晩期前半住居跡の例から、長短比の少ない円形基調の平面形を持つと考えれば、未報告遺構2は直径少なくとも18m前後、5は12m前後の規模を持つと推測できる。未報告遺構5の北側に近接する85号住居跡もほぼ同時期で、土層断面図にかかる規模では6m弱の遺構である。調査日誌の記載から11区でも住居跡が存在した可能性が示されているので、主として堤状貝層の内側に安行3b式前後の集落が極めて良好な状態で遺存しているだろう。晩期前半の遺構内貝層も存在するのだから、南関東屈指の縄文時代晩期集落と予想するに充分である。加曾利貝塚はこれまで中期の北貝塚・後期の南貝塚とのイメージが強く、晩期についてはさほど注意が払われてこなかったといっても言い過ぎではなからうが、晩期前半においても東京湾東岸地域を代表する遺跡であると示し得たことは本書の大きな成果であったとして良いだろう。

### 第3節 出土遺物の内容と特徴

第4章記載の各種出土遺物の内容と特徴をまとめておく。出土した土器は膨大であり、その全体数を把握することはできなかった。掲載し得た資料はごく一部であるが、それでも4,100点に及んだ。土器以外の掲載遺物は、土製品1,329点、石器・石製品1,761点、骨角歯牙製品349点、貝製品693点である。北貝塚では土器片錘と貝刃が多く、東傾斜面では土器片錘と土器片円板が多い。南貝塚では土偶・土器片円板・土製耳飾・貝輪・骨角製品(刺突具・髮針・垂飾等)が多い。この内容を各地区の主たる時期に照らすとこれまでに知られている当地域の時期的な傾向に調和的である。今後の発掘によって、時期的な変遷や、中期大型貝塚期から後期大型貝塚期に引き継がれたもの、途切れたものなどを検討しうるであろう。このような分析を単独の遺跡でなしうる点が当遺跡の特質といえる。

全体を通して発掘の規模に比して多いと考えられるのは、磨石類、石皿・台石などの植物質食材の加工・調理具、魚類の加工・調理具とみられる貝刃、骨角製ヘラや砥石などの加工具、そして軽石製品である。石鏃や玉類等小さな遺物は回収率が低いと推定されるが、近年では考えられないほど少ない予算、短い調査期間のなかでこれだけの資料を得たことには、驚きを禁じ得ない。

#### 1 土器

加曾利貝塚から出土した縄文土器が、早期から晩期に及ぶことはこれまでも述べてきたが、層位や遺構に基づく一括性を保証できる資料に恵まれないことから、編年的な検討は困難である。しかしながら出土土器全体を見渡した時に意識される他の遺跡とは違うという違和感があり、再整理を進める中でその原因を若干は掘り下げることができたと思えるので、二つの点に絞って述べておくこととする。

##### (1) 土器の巧拙と規格からの逸脱

加曾利貝塚博物館の展示を見るにつけ、他の遺跡や展示施設で慣れ親しんだ縄文土器と比べて雑で稚拙な作りとを感じる個体や、器形と文様構成の組み合わせの上で思い当たるものが少なく珍しい個体が多い印象を持った者は、研究者に限らず少なくないだろう。雑な土器・珍奇な土器の詳細は省くが、雑な印象を与える土器は作り手の技量が未熟であるということで、類例が乏しい土器は製作・使用する者の大多数が望ましいと思う規範に外れているから少数の製作に止まったということであろう。技量と規範は加曾利貝塚の土器全体から感じる違和感の二つの側面であり、技量の劣る土器＝規範を逸脱する土器ではない。器形・文様・調整で見劣りする土器には規範を遵守したものも逸脱したものもあり、規範に沿わない土器にも

熟練者の製作と思えるものと非熟練者の製作と思えるものがある。何れの側面を持つ土器も、大半の遺跡では極めて少数の出土に止まることを体験的に知っている者は、加曾利貝塚の土器全体から違和感を受けるのだと考える。

土器製作のようにヒトが後天的に獲得する能力は、既に獲得している者からの伝習と経験の蓄積によって初心者→非熟練者→熟練者と成長する。そのため、見様見真似でかろうじて形を成す程度の稚拙なものから、実用に耐えるが見劣りするもの、標準的な技量と認められるもの、現在であれば逸品と呼ばれるものまで、様々な技量の熟達度を体現する土器が製作されたに違いない。燃料や原料を無駄にすることになるので、実用に耐えない未熟な土器の大部分は焼成せずに潰して素地土に戻っていたであろう。もちろん非熟練者に止まるものも熟達者(名人)となるものもいるだろうが、世代を超えて技術が伝承されるには、一定数の熟練者と熟練者になりうる非熟練者が不可欠と考えられるから、技量の保持と向上のために見劣りのする製品であっても実用に耐えるものは完成品として焼成したであろう。土器の巧拙という側面では、加曾利貝塚は非熟練者の製品が大量に残された遺跡と言うことができよう。

土器の形の細部(段や括れの有無)は、土器全体に対して文様をどのように構成するかと密接に関わっているので、器形と装飾の一体となった類型が存在する。ある時期のある用途の土器の類型が単一の場合も複数の場合もあるが、土器の大半が既知の類型に当てはまるので破片状態の土器を分類する根拠となっている。今日の工業製品になぞらえれば「規格」と呼んでも良いだろう。そのため既知の類型に当てはまらない形態と装飾の組み合わせを目にすると、我々は「規格外品」と認識する。非実用的な芸術作品ならばともかく、用途の定まった実用品では、使用者が規格外品を敢えて選択する場合は少ないので、「規格」は維持されていくと考えられる。また従来に無い器形と装飾の組み合わせが広く受け入れられたなら、それは新たな類型となっていくだろうから、今日の我々が類例に乏しい個体と感ずるものは、製作者の技量未熟や創造性の発露かに関わらず、消費側が受け入れなかった「試作品」に止まったものと言うことができよう。

仮に土器製作と技術の伝承を全ての集落で行っていたならば、全ての遺跡で見劣りのする仕上がりの土器、個性的な装飾であったり珍奇な形の土器が少なからず出土し、考古学者の仕事は今より遥かに手間のかかる困難なものとなっていたに違いないが、実際にはそうではない。一定の見栄えと好ましく思える規範の基に、完成した土器の中から使用する土器を選択していたからこそ、未熟な製品や規格外品は大多数の遺跡では稀にしか出土しない。多くの集落では土器の生産は行わず専ら消費する側であったということで、経済的な原則に沿って土器が流通していたことを示しているのであろう。未熟な製品や規格外品を多く出土した加曾利貝塚の土器のあり方は、他の集落に対して土器を供給する立場にあった集落であり、消費側によって選択されなかったものが生産側に残った結果であるという見方を仮説として提出したい。

この仮説の検証には、土器に表れる技量の相対的な優劣を観察可能な要素に基づいて共通言語化して表現することが必要であり、そのためには優品・良品・劣品の判断基準となる標識の設定が不可欠である。技量の言語化と標準化には土器の復元製作実験が有効と思われ、初心者が熟練者の製作過程を模倣しながら製作をくりかえし、その製品を時系列に沿って記録・観察・比較することによって、観察する側が技量を見分ける際に有効な要素と優劣の判断基準を構築していくことができるだろう。

一方、劣品が主体となる遺跡と良品主体の遺跡を技量判断の標識遺跡として設定し、土器型式単位での遺跡ごとの土器全体の比較を行っていかねばならないが、加曾利貝塚はこの意味でも標識遺跡とするにふさわしく、当面劣品主体の遺跡の基準となるだろう。

## (2)土器の構成の偏り

加曽利貝塚の加曽利EⅢ式期の土器を見たとき、他遺跡と比較して(加納 1994)の言う「意匠充填系土器群」と「横位連携弧線文土器群」の比率が極めて少なく、キャリパー形深鉢形土器の占める割合が高いと考えられる。というのも「キャリパー形土器群を如何なる型式学的画期を以て加曽利EⅡ式期とEⅢ式期に弁別するのかという命題」が、今日においても未解決で残されているからだが、今仮に加納が加曽利EⅢ式の一括資料として示した群馬県荒砥前原4T1住居跡や茨城県南三島遺跡6・7区42号住居跡に伴ったキャリパー形深鉢形土器を加曽利EⅢ式とすれば、口縁部と体部の器形上の境界の不明瞭さが同様かそれ以上の土器が、加曽利貝塚から器形復元可能な良好な遺存状態で多数出土しているので、加曽利貝塚の加曽利EⅢ式期の土器組成が偏っているのだと判断する。

この現象を先の仮説から解釈するなら、消費側の指向が「意匠充填系土器群」と「横位連携弧線文土器群」といった新たに成立した類型に向かっていった結果、伝統的な類型であるキャリパー形深鉢形土器の需要が減少した結果とするのが理解しやすい。

称名寺式期では、中津・称名寺系の土器と加曽利E系の土器(加曽利EⅤ式)に、地点または遺構単位で比較した場合極端な偏りが見られる。称名寺式期の柄鏡形住居跡の可能性のある113号住居を検出した9次調査cトレンチに加曽利EⅤ式は見られず(3-215 図23~32)、一方加曽利EⅢ式期の住居と共通する構造的な特徴を持つ133号住居(3-271 図273~281)・134号住居(3-271 図282・283、3-272 図300)では、中津・称名寺系がまったく見られない。そもそも加曽利貝塚では(鈴木 2007)の規定によるIa式・Ib式がほぼ見られないことから狭義の称名寺式の受容が千葉県内の他遺跡よりも遅いという可能性(東京湾西岸の遺跡と比較すれば出土量は確実に少ないが、Ia式の出土を確認できる遺跡は少なくない)が考えられるが、集落内で系統別に土器を廃棄していたとするならば、これもまた土器を生産している集落ならではの現象と解釈することも可能であろう。

加曽利貝塚という遺跡の特質を捉えたいという意識から、出土した縄文土器に見いだした問題点の一部を変則的な形ではあるが述べてきた。再整理の対象となった土器は、加曽利貝塚に埋蔵されている土器全体のおそらく1割に満たない分量と推測するが、その中から選択して本書に図化しただけでも、少ないとの評価は無かろうと思う。本来は出土層位や遺構に裏付けられた資料としてこれらの土器の分析に取り組みたかったのが偽らざる心境であるが、それが叶わないが故の変則とご理解頂ければ幸いである。

図らずも、加曽利貝塚の土器から見いだした問題は、縄文土器の生産と流通の実態を、より意識的に掘り下げていく必要を感じさせるものであり、その為に加曽利貝塚が果たす役割は、今後もきわめて大きいと思われる。加曽利貝塚博物館が活動の一環として縄文土器の復元製作実験を推進してきた経緯も合わせて、加曽利貝塚が国指定史跡として保存されてきたことは実に幸運であり、意義深いことであったと言えるだろう。

## 2 土製品

**土偶** 87点出土しており、中期後半~後期前半の土偶が3点、後期中葉~後葉の山形土偶が45点、後期後葉のみみずく形土偶が22点、晩期前半の土偶9点などがある。山形土偶が多いのは、加曽利B式期の貝層・包含層の調査が多かったためであろう。

**土器片錘** 960点出土し、中期主体の北貝塚に多く、後期主体の南貝塚で少ないのは当地域の傾向を表している。素材となった土器片の時期は99%が中期の土器であり、北貝塚を形成した加曽利E式前半までの土器がほとんどである。県内では加曽利E式後半にも比較的多くの土器片錘が出土する例が知られているが、当遺跡では明らかに加曽利EⅢ式以降に下るものがほとんどみられない。当地域においては、こ



の時期の集落から例外なく多量に出土し、また、低地に埋没した当時の河口干潟から多数出土する(市原市市原条里制遺跡群)。したがって漁網錘として漁場で使われ、集落に持ち帰って補修することが多かったとみて大過ないであろう。使用時は水を含んで重くなり、乾燥すれば軽くなって運搬の負担を軽減する土器片錘は、こうした使い方に適していたと考えられる。漁撈活動は後期にも活発に行われているが、土器片錘は激減する。漁法の変化を想定する意見など議論が深まりつつある(堀越 2010・服部 2011)。

### 3 石器

調査の規模に比して石器はかなり多い。磨製石斧と打製石斧は中期主体の北貝塚に多い。砥石は後期を主体とする南貝塚に多い。石錘は6点すべてが南貝塚から出土している。石棒は東傾斜面と南貝塚に多い。これらは時期的な傾向を示すものであろう。遺構からまとまって出土した例としては、112号住居跡(大型住居跡)の19点が突出している。石棒2、玉類2、軽石製品4、磨製石斧1、石皿・台石類3、砥石5がある。磨製石斧と石皿片1点も砥石転用の可能性があり、研磨後の摩耗が少ない軽石穿孔品との関係をうかがわせる。

**磨石類** 各部位を様々な用途に使う複合的な道具であるため、部位ごとに使用痕跡等を記載する方法をとった。その結果、端部は叩き割り・潰し、突き砕き・潰しなどに使われることが多く、平面の広い平滑面は擦り潰し等、平面中央は叩き潰し等に使われたものと、突き砕き・潰し等の下石に使われたものが多いと推定された。側縁は突き、擦り等に使われたものが多いが、滑り止め等を目的とした調整痕を残すものも多いようであった。成形品は使用痕の斉一性が高く、ある程度使用法が限定されていたのであろう。円柱形成形品は晩期に特徴的な器種のようなものである。平面形が楕円・隅丸方形・円形で平面に馬の背状の広い磨面を形成するもののなかには、一定方向にローリングしつつ擦る動作が6例に認められ、表面の黒ずみが複数に観察された。特定の用途に関わる可能性がある。恣意的に磨石類、叩石などに分類する方法で集計された点数では遺跡間の比較検討に耐えないことは明らかである。今回の方法はある程度遺跡間や時期的な差を捉えられる可能性があると考えられるが、観察・記載や比較検討の議論が必要である。

**石皿・台石** 非常に多いことと、欠損率が96.7%と全器種中もっとも高く、砥石・磨石類に転用されたものが多いことが最大の特徴である。図版80~92を見ると明らかなように、石皿としての役目を果たせそうなものはみられず、唯一欠損なしとした35も、大きな製品の破片を再加工したものである可能性が高い。破損するまで使用し、破損品の再加工・再利用が徹底して行われたものと推定された。こうした傾向は石材の限られた当地域の一般的な傾向ではあるが、これほど徹底している例は知られていないのではないか。

**砥石** 121点は多いといえるであろう。その7割は砂岩製(砂岩・軟質砂岩・銚子砂岩・弱固結砂岩)である。北貝塚では厚く大きな板状砥石が持ち込まれ、破損しつつ不整形のまま使われている。東傾斜面ではこれに薄板状が加わり、南貝塚では薄板状・扁平が多かった。これは疑似的ではあるが時期的な傾向を示している可能性が高い。大きなものから、小さく定型なものに変化するあり方は他の遺物に共通するものとみられ、後述する。硬質な石材の一部に平滑な光沢面をもつものは、研磨成形用砥石の可能性が高いと判断し、仕上砥とした。小礫も多いが、片岩系の石棒(石剣)や、緑色岩・変質閃緑斑岩・透閃石岩等のきめ細かく硬質な石材の磨製石斧の破片の多くが砥石として再利用されていた。

**石鏃** 121点あり、黒曜石が54%、チャートが32%であった。東傾斜面の遺構出土が多いのは、発掘年度が新しく回収率が高かったことが影響しているものとみられる。

## 4 石製品

軽石 381 点と多く成品は 109 点に及ぶ。穿孔品・成形品の形態は地区による差が明確であり時期的な変化を示すものとみられた。脆い材質に関わらず欠損率が低く、穿孔品には紐ずれがほぼ認められないことから、浮子としての使用や長期の垂下の可能性は否定し得ることを述べた。「垂飾」には日常的に身に着けないものがあったことを示唆する。広く平坦な研磨面を有するものも多かったが、用途の解明は今後の課題である。

**玉類** 112 号住居跡でヒスイ丸玉 2 点が出土したこと、123 号住居跡でヒスイ玉小片 1・素材 1 が出土したこと、ヒスイの残核・剥片類が出土したことを特筆し得る。大珠 3 点のうち、4-27 図 2 は円柱状の大型優品であるが被熱白色化していた。大珠が火を受けて白色化し、土坑等に埋めるなどの特別扱いせず、廃棄された状況を示すのは当地域の特徴である。大珠の扱いを知るための重要な事実であるが、展示資料としてみると残念なことである。

**石棒** 北貝塚 1-1 区で検出した堀之内 1 式期の 6 号住居跡床面から異形の石棒と石棒小片が出土している(4-74 図 1・2)。いずれも被熱や加工の痕跡があり、石棒祭祀を示唆するものとした。112 号住居跡床面から並んで出土した 2 点の有頭石棒は、遺構の性格や石棒の使われ方を議論するための資料として、また、当該期の石棒形態の基準資料として重要である。

丸棒状のノジュールを素材とした石棒状石製品(4-77 図 2～5)は、類似資料が木更津市祇園貝塚で多数出土している。石棒の流通を考える上で古い時期の資料といえる。

## 5 骨角歯牙製品

373 点の骨角歯牙製品は、数千年に渡って骨や貝を保存する貝塚の重要性を物語るものである。点数は多くの器種で南貝塚が北貝塚を上回る。とくに髪針・垂飾・弭・骨角鏃・刺突具類が多い。加工具とみられるヘラ状製品は北貝塚にも多い。

**垂飾** 49 点あり、形状も素材もバラエティに富んでいる。数が多いのは哺乳類歯牙製 20 点、鹿角製 10 点、鳥または小型哺乳類の管状骨製 8 点で、ほかに魚骨製、哺乳類椎骨製、海生哺乳類骨製などがある。牙玉ではイノシシの左右犬歯を一對とするもの(4-18 図 11・12)、ツキノワグマの犬歯製(19)がある。穿孔品では、スズキのエラの骨(26)やサルの四肢骨(27)、ウミガメの骨(32・33・39)、ツキノワグマの指骨に赤彩したもの(40)などがある。41 は小形哺乳類の指製のごく小さな成品だが、赤彩され、骨幹部の側面に丁寧に穿孔している。53 はシカ角座骨・骨幹部を研磨・彫刻し、複雑・緻密な意匠をもつもので赤彩を施す。採集品だが加曽利貝塚出土とすれば優品である。

**弭** 8 点と多く、83 はきわめて薄く仕上げられ朱彩とアスファルト状の付着がある。紐を縛った痕跡も認められた。

**狩猟・漁撈具** 釣針 8 点、骨角鏃 17 点、銚頭 2 点、ヤス状刺突具 31 点と豊富である。鹿角製銚頭は大きな優品である。

**加工具類** 骨角錐としたもの 5 点のうち 4 点(159～162)はタイ科の鱗棘の先端に使用痕が認められたものである。先端の磨滅光沢が顕著なものと回転穿孔に使われたとみられるものの先端の写真を図版 125 に示した。牙斧 8 点を含めて、ヘラ状の製品が 64 点ととても多く、イノシシ歯牙・四肢骨、シカ角・四肢骨・下顎骨と素材も多様である。コウノトリの骨製品は、コウノトリ科骨自体の出土例が少なく、特別視された製品であった可能性が高い。

**加工歯牙・骨・角** 加工の痕跡をもつものは歯牙 6 点、角 86 点、骨 40 点があり、シカの下顎骨先端が

意識的に折り取られたものが南貝塚で5点出土している。大網白里町養安寺遺跡で同様の先端部分が70点以上出土しており、顎体はへら状の道具(皮なめし具か)として使われている。加曽利貝塚の点数は今のところ2番目に多く注目される。素材が持ち込まれ、加工が行われた証拠といえる。

## 6 貝製品

669点を数える。内訳は貝刃487点、へら状貝製品17点、貝輪114点、他の貝製品50点(タカラガイ4点、ツノガイ16点、彩色・顔料付着貝9点、加工をもつ貝8点、未加工／素材13点)である。

**貝刃** 487点は、市原市西広貝塚の1170点、緑区有吉北貝塚の459点に次ぐ数である。2遺跡は貝層の大半を調査しており、加曽利貝塚の数はそれらをはるかに凌ぐ数を包含しているであろう。貝刃の用途には鱗取り説と包丁説が知られているが、刃部の使用痕の観察から、大半を占めるハマグリ製は鱗取り説を有力とした。あまりにも多い貝刃は、日常の食以外に魚の処理が行われた可能性を示唆する。カガミガイ製貝刃については切る・捌くといった用途の可能性を指摘した。ハマグリ製の貝刃では、北貝塚と南貝塚で刃部の付け方に差が認められた。貝殻後側への志向性は中期から後期初頭まで継続し、貝刃が少なくなる後期前葉に変化した可能性が高いと考えた。貝刃の多くはへらとしても使われたらしい。貝刃としての使用は平坦な後寄りを指向しており、へらとしての使用は選択性がないか、または、形状の異なる前後を使い分けた可能性を指摘した。

**へら状貝製品** 加曽利E式前半期には大きな二枚貝を使った製品2種が盛行した。主にアリソガイを素材とするA型(研磨用)と、ハマグリ製のB型(へら)であり、加曽利E式後半から後期前葉にはA型の素材がハマグリに入れ替わったことが判明している(西野 2002)。当遺跡の資料もこの見解を裏付ける内容であった。

**貝輪** 北貝塚22点、南貝塚89点、その他3点の計114点であり、南貝塚に多い。北貝塚ではイタボガキが18点とほとんどを占め、南貝塚ではベンケイガイ、サルボオが多い。伊豆諸島以南からもたらされたと推定されるオオツタノハ製の貝輪が7点も出土していることは特筆される。完形の5点は南貝塚の貝層から一括で出土した貴重な事例である。京都大学総合博物館保管の貝製品(4-141 図16)は赤彩をI字形に塗り残すハマグリ、4-132 図135は両面に連続する曲線文を描くハマグリで、いずれも類例のない珍品であり逸品である。

## 7 塊状灰

千葉市大膳野南貝塚で「漆喰」と報告され注目を集めているものである(小林・中村他 2014、パリノ・サーヴェイ株式会社 2014)。石器や灰サンプル、貝サンプルから同様のものが19点見つかっており、床面状の平坦面をもつ2点の成分分析を委託した。その結果、大膳野南貝塚で「漆喰」の証拠とされた生石灰(CaO)は今回の分析では検出されなかったが、貝殻片由来の石灰質塊状物であるとされた。加曽利貝塚では、貝層中の焚火跡のほか、報告対象とした調査区・遺構にも関係を検討すべき事例が多い。焚火跡に類するものは北貝塚2区に、住居床面の灰の堆積は2号・77号・82号住、窪みや埋設土器に灰が充満するものは5号・47号住に例がある。77号・82号住は灰層の上面に埋葬している。これらの事例の多くは中期のものであり、貝灰等の生成が中期まで遡るのかどうか、また、「漆喰」と呼ぶべきものも存在するのかどうかなど、今後確認していく必要がある。

## 第4節 素材の入手と資源利用

## (1) 石材研究と貝塚

後藤和民による「大型貝塚＝干し貝加工場説」は、大型貝塚の成立の意味を明快に説明しただけでなく、加曽利貝塚の広域保存を支えた理論的根拠となり、加曽利貝塚博物館の展示の柱ともなった(第2章第1節4)。後藤は、干貝生産の目的を他の物資と交換することにあつたとし、地域・集落間で様々な物資を相互に交換していたと述べた(後藤 1973)。新井重三による石器石材の原産地推定の成果(新井重三 1984)は、それを支えるものであった。

しかし、新井氏のデータを使って地域・集落間の比較検討を行うことは困難な状況となっているため、柴田徹氏に石器全点の再鑑定を依頼し、器種ごとの石材産地や入手ルートの推定が行われている(第6章第1節)。黒曜石については、産地推定については、建石徹・二宮修治両氏に委託した成果(建石・津村・二宮 2004、建石・二宮 2005)を転載させていただいた。

周辺地域内での発掘調査が進んだことによって、大型貝塚とそれ以外の集落の間で石器数や構成に大きな差がないこと(阿部 2000)や、隣接地域に貝層を形成しない集落群が存在することなどによって、海の産物と山の産物の交換といった単純な図式は成立しなくなっている。石材の産地やルートの分析が進めば、こうした近隣地域内での物資の流通が見えてくるであろう。

石材以外にも目を向けるべきであり、今回は動物素材についても入手、利用・転用等についておもに遺物の観察結果から検討を行った。

## (2) 剥片素材

加曽利貝塚は、石鏃がきわめて乏しく、剥片がほとんど出土しない遺跡の代表的な例とされてきた(後藤 1974c, p. 191)。確かに多いとは言えないが、その理由の一端は回収率が低いことによることは明らかである。しかも剥片類は1,300点余りあるので、ほとんど出土しない、きわめて乏しいという見方は当たらないであろう。

剥片類は黒曜石が6割、チャートが4割弱を占める。おそらく、今回の整理作業以前に行われた貝サンプルのフルイがけによって回収されたものが多いものとみられる。黒曜石とチャートの剥片の最大長の平均・分布をみると、市内の他の中・後期の平均値に比べて明らかに大きかったが、これは小さめの剥片が回収されなかったことによる可能性が高い。今後、貝サンプルなど細かいフルイをかけた試料の分析によって検証する必要がある。

黒曜石の原産地推定分析では、北貝塚は神津島が圧倒的に多く、東傾斜面では神津島にやや信州系が混じる。南貝塚では神津島と信州系が主体となっていた。この結果はこれまでの県内の分析成果と同様である。

## (3) 石器・石製品の破損・転用

石皿・台石や磨製石斧、打製石斧の破損率がきわめて高く、再加工や器種間の転用が目立っている。磨製石斧、打製石斧、石棒、石皿・台石から砥石・磨石類に転用したもの、磨石類から焼け礫に転用したもの、焼け礫から磨石類に転用したものが多く、北貝塚では磨製石斧から砥石・磨石類への転用例がとくに多く、南貝塚ではこれに加えて石棒や石皿・台石から砥石・磨石類への転用例も多いことがわかる。転用率が高とも高いのは南貝塚の磨製石斧から砥石・磨石類であり、北貝塚もかなり高い。

欠損率は磨製石斧・打製石斧で8割から9割、石皿・台石類と石棒は10割に近い。一方、石鏃・玉・軽石製品は使用可能な形状を保って土中に至ったものが多い。再加工率は地区間の差が認められる。北貝塚と南貝塚は比較的高いのに対し、どの転用例をみても東傾斜面で低かった。定住性の高い時期に比べて、定住性の低い時期には相対的に転用が少ないことが数値に現れたものと推定した。

#### (4) 石材利用の特徴

砥石の分析では、中期から後期にかけて、不定形の大きな素材から、小さく薄く企画性をもつものへと変化した可能性を指摘した。この傾向は、ヒスイ製の玉類や石棒にも当てはまる。資源の減少により素材が小さくなるとともに、附加価値が与えられる傾向にあったものと考えられる。

石皿・台石と磨製石斧は破損率がきわめて高く、再加工・再利用率がとても高かった。こうした徹底した資源の有効利用は、当地域の拠点集落に広く見られるが、例えば使用可能な石皿がほぼ見られないほどの徹底は他の集落には見られないのではないか。

#### (5) 動物素材の入手

貝層によって保護され、良好な状態で保存された骨角歯製品には、高い技術や入念で丁寧な仕事ぶりなどが観察される。砥石、骨角貝製のヘラ、軽石製品など、成形や研磨に使われた道具が目立つ。

7-1 表 貝製品の主要素材の変化

	中期	後期
貝輪	イタボガキ・アカニシ	ベンケイガイ・サトウガイ・オオツタノハ
ヘラ	アリソガイ・ハマグリ	チョウセンハマグリ
垂飾	少ない	多い(タカラガイ・ツノガイ)
傾向	内湾・近接地	外洋・遠隔地

貝製品の素材として集落に持ち込まれる貝種は、中期から後期にかけて明確に入れ替わる(7-1 表。忍澤・村田・森本 2012)。千葉市付近の調査例で貝輪の素材をみると、中期ではイタボガキのほかにサルボオ、アカニシも多いが、北貝塚ではこれを欠いている。当遺跡の特徴といえそうだが、南貝塚の調査以降に貝輪の回収率が高くなった可能性が高く、その影響が関係している可能性がある。今後検証すべき課題である。

全体としてコウノトリやツキノワグマなどの稀少動物、大きなヒスイ製品やオオツタノハ製品など、遠隔地の希少な素材、とくによいものが集まっている印象がつよい。加曽利貝塚には、東京湾東岸の貝塚群のなかでも、とくに優品が集まる理由が何かあったのであろう。

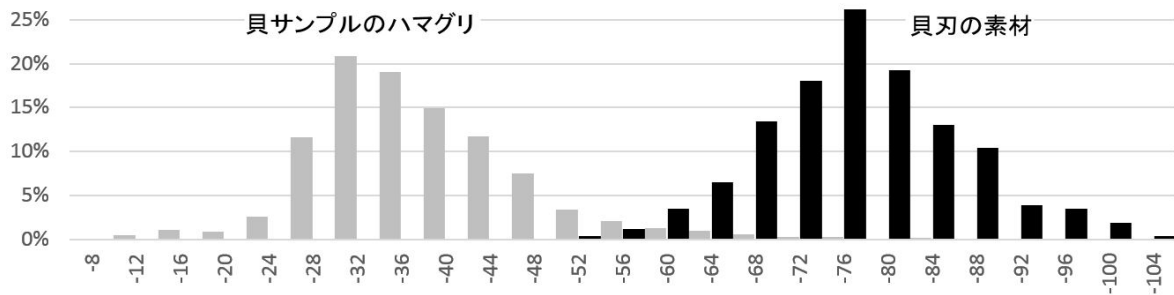
遠隔地から入手したものだけでなく、ハマグリ、カガミガイという日常的に入手可能な素材についても、食用として持ち込まれたものを再利用したのか、製品用に持ち込んだものを識別できる可能性がある。ハマグリでは貝刃と貝サンプルのものを比較すると、7-2 図のようにサイズに明らかな差が認められる。水摩や虫食いなど死んだ貝殻を持ち込んだことを示すものも多い。カガミガイ製貝刃は、左殻の大きな貝殻を選択的に持ち込んでいると判断した。右利きの人切る・捌くという動作をしようとする、殻頂部の形状がとても持ちやすいことが理由であったと推測した。

大型貝塚において、貝殻は廃棄物の中心を占めていたはずである。貝灰の存在は、貝製品以外にも貝殻を有効に利用していた証拠としても重要である。廃絶した施設内に投棄した貝殻や、堤状に盛り上げた貝殻に対して、どのような思いが込められていたのかについては、今日でも研究者によって隔たりが大きい。貝層を盛り上げる意図があったことは明らかである。また、少なくとも、結果としてシンボリックな構築物のような効果・役割を果たしていたことも明らかであろう。

今回、北貝塚の堤状貝層は中期段階には開口部をもっていたこと、後期の段階で環状の貝堤が完成されたことが明らかになった。このことは、構築物の形成を意図したという見方を後押しするものであり、それが正しいとすれば、廃棄物の有効利用として、究極的なものということができるであろう。

#### (6) 素材の入手・利用からみた加曽利貝塚の特質

石材の徹底した有効利用は、素材となる石材の乏しさや、入手の難しさが関係しているであろうが、地域内での差はそれだけでは説明できない。定住度の高さや流通に関わる社会関係なども影響しているものと考えられる。資源を無駄なく使う知恵や工夫が数多くみられ、長期間継続してみられるのは定住的な生



7-2 図 貝刃とサンプルのハマグリの殻長比較

活によって発達した伝統でありその継承であったと考えられる。

## 第5節 動植物遺体と資源利用

発掘調査と整理作業の方法によって、貝塚から見えてくるものが全く異なることをもっとも端的に物語るのは、動植物遺体の分析であろう。明治時代の調査では貝ばかりの貧乏貝塚とまで言われたが、大正期から戦前にかけて貝層の堆積状況に関心がもたれるようになると、様々な活動の痕跡が観察されるようになった。保存運動に伴う発掘では、貝殻以外の遺物をできる限り回収することによって膨大な資料が残された。大きなハマグリやカガミガイは貝刃に、土器片には土器片錘に加工されているものがあることに注意が向けられると、遺物台帳は貝刃と土器片錘で一杯になっていった。その後、貝塚調査・研究を大きく変えたのはフルイを使った微小遺物の回収と動物遺体の種・部位同定作業の導入である。貝層を細かいフルイを使って洗ってみると、多量の小魚の骨が混じり、また堅果類や植物種子も見つかるのである。

今日当たり前に行われているこれらの方法を導入したのは、当遺跡の発掘に参加した多くの研究者であった。当遺跡で初めてこれを導入したのは 1989 年の史跡整備に伴う発掘調査であったから、今回の整理対象のほとんどはそれ以前の資料である。調査地点によってサンプル採取の有無が異なり、採取されたサンプルから骨が抜き出されてしまい、それをどのように扱ったかが不明であるため、魚類・鳥類・哺乳類等の組成を提示することは控えた。資料と調査方法の限界による制約は多い多いが、分析の結果、多くの発見や興味深い見解が得られている。今後の精緻な調査と分析によって見えてくるものに対する期待は大きい。

### (1) 貝類

イボキサゴ、ハマグリの 2 種が中心となり、これにアサリ、シオフキを含めた 4 種が大半を占めるあり方は、中・後期の都川・村田川貝塚群全体の共通点である。村田川流域の貝塚では、ほぼその状態が維持され、大きさも安定している。これに対して、加曾利貝塚の場合は①ハマグリの幼貝利用＝乱獲がかなり進む、②主要 4 種以外のヤマトシジミ・マガキ・オキシジミ・スガイがかなり混じる、③東京湾沿岸ではほとんど食用とされないウミナナ科やオキシジミが利用されている、といった特徴が認められた。主要貝種の資源が枯渇したときに、他の多くの種を利用している可能性が伺える。地理的に隣接する村田川流域との貝類資源利用の違いについては、例えば以下のような理由が考えられる。主な漁場となった都川河口干潟と、村田川河口干潟を比べると、同一海域を利用したと想定される集落の数が、都川の方がかなり多く、集落間の競合により資源の枯渇が進みやすかったということである。中期でみると 1-2 図に三角マークで示した草刈場・荒屋敷・加曾利・月ノ木・へたの台などの拠点的な集落が同一あるいは近接した漁場で漁を行っていた可能性が高い。中期集落群の中心地における貝類資源の不安定性は、地域社会の継続性を危うくする要素となったのではないかと考えられる。

中期の貝類資源利用については、北貝塚3区Cトレンチ(貝層断面観覧施設)の南壁から採取したハマグリ<sup>1</sup>の成長線分析の成果がある(樋泉 1999)。詳細にわたる分析を摘記すると、北貝塚の中期貝層のハマグリは生殖年数に達する前後に成長した時点で、ほとんど採りつくされてしまう乱獲の状況にあり、分析を行った部分では時期を追うごとに採取する季節が早くなり、捕獲圧が激しくなっていた。こうした分析を他の遺跡を含めた流域貝塚で増やし時期ごとの差や変遷を捉えていきたいところである。

**イボキサゴの利用** 本種の活発な利用の意味については、未だ未解明の部分が多いが、少なくとも二つの利用方法があることが見えてきた。しばしば分厚い堆積層を形成する破碎キサゴ層のイボキサゴは通常のイボキサゴ層のそれに比べて明らかに小さいものであった。このことは金子浩昌氏によって古くから指摘されていたが(金子 1988)、今回計測によって確認することができた。樋泉岳二氏は、破碎キサゴ層に含まれるハマグリ<sup>1</sup>の成長線分析によって、漁の季節は冬から春に限定されていたことを明かにしている(樋泉 1999)。一方、通常のイボキサゴ層では多くの季節に採取されていた。

日中に潮が引かず、水温の低い冬季の貝漁は、丸木舟の上から柄の付いたかご等の道具を使わなければ不可能であったことはほぼ確実である。干潟の表層に大量に棲息する本種はそれに適しており、破碎キサゴはこの季節の幼貝の利用に関係していた可能性が高まった。徹底した殻の破壊の理由・方法や用途については謎のままであり、食材としての利用以外を想定する意見もある(第6章第3節2)。本種は東京湾東岸の大型貝塚の貝の8割以上を占めている。このように小さな貝がなぜ大型貝塚をつくったのかは、大型貝塚をめぐる最大・最重要の謎であり、その解明は大きな課題の一つである。

## (2) 微小貝類

微小貝類の種組成から、加曽利E式前半から堀之内式期までの林床は低木のほとんど存在しないような管理された空間であったと推定された。一方、加曽利B式期には下草・低木の刈り取りを弱めたことが想定された。加曽利貝塚の集落景観がデータとして示されたのは今回が初めてであろう。今後、分析地点を増やすとともに、調査段階からサンプルの採取層位や時期等の明確な試料を増やしていくことによって各時期の景観がさらに明らかになっていくことが期待される。

## (3) 魚類

現地採集資料による分析では、どの地区でもクロダイ属が圧倒的多数を占め、スズキ属やコチ科などの内湾性魚類がやや目立っていた。貝サンプルと、魚骨集中層の土サンプルから検出した資料の分析では、イワシ類・ハゼ・アジ・サバ・キス・カレイ等の小形魚にスズキやクロダイ・コチなどの大形魚が混じるという当地域の一般的な傾向を示すものの、ウナギ・コイ科・ドジョウ・ギギなどの汽水～淡水魚も利用されていたことが明らかになった。魚骨集中層ではハゼを中心とした小形魚が多量に入っており、アジの体調組成に興味深い傾向がみられた。

## (4) 鳥類

今回の分析で2つの重要な発見があった。一つはヘラ状製品(4-92 図 225)の素材がきわめて出土例の少ないコウノトリ科と同定されたことである。しかも、縄文時代の加工例は初めてであるかもしれない。もう一つは29号住の柱穴から46点もの鳥骨が一括出土したことである。うち45点は海洋に生息するカモ類と同定され、冬季の狩猟で得たものとみられる。遺体が置かれ火が焚かれた後に、利用の少ない海鳥の骨の投棄は埋葬された人々に対する特別な思いが込められていたのであろう。

## (5) 哺乳類

イノシシ・シカ主体であり、顎骨と遊離歯の再同定とこれまでの分析成果との検討によって、全体としてイノシシが優勢だが、北貝塚に比べ南貝塚ではシカが多く、イノシシ・シカとも南貝塚では若い個体が多いという傾向が明らかになった。この2種以外ではイヌがかなり多かったが、より小さなものは回収率が低かったものとみ

7-2 表 人骨の出土数

		北貝塚	南貝塚	東傾斜面	南外縁部	不明	全体	
埋葬	埋葬	28	36	1	4	1	70	
	成人	19	15	1	2	1	38	
		若年	4	2		1		7
		乳幼児	1	4				5
	集積骨	成人		4				4
		若年	1					1
	埋葬?	成人	1	1				2
		若年		1				1
		乳幼児	2	2				4
	土器棺葬	成人						
乳幼児			7		1		8	
散乱	散乱骨	38	119	3	1		161	
	成人	27	57	3			87	
		若年	2	10				12
		乳幼児	8	41				49
		不明	1	11		1		13
合計	66	155	4	5	1	231		

られる。イルカ類の椎骨が30個ほど連なって出土した事例は、内湾沿岸の貝塚としてはきわめて特異であり、北貝塚2区においてもクジラ類11点がまとまっている例がみられた。

## (6) 植物

貝サンプルの水洗や現地で取り上げられた炭化材に混じって、比較的多くの植物遺体が検出された(第6章第2節1)。クルミ、クリが多いが、アズキ、トチ、クヌギ、コナラ、ヒシ、鱗茎類などの当地域では出土例が少ない貴重なものが含まれていた。貝層内に焚火跡などを多く包含する当遺跡は、この点でも大きな可能性を秘めており、今後のサンプリングと分析による植物質食材の利用の解明に期待がかかる。土器圧痕の調査では、キハダやダイズ属、エゴマなどの食用となる有用な植物が確認された(第4章第2節3)。今後の調査によって、植物質食材の利用の時期的な変化などの検討が可能になると期待される。

さらに、東傾斜面の東側、坂月川谷のボーリング調査によって、縄文時代の層が良好に遺存していると推定される。現地表面から3m以下の深さに縄文時代の層が残されていることを明らかにしており、今後の調査と再検討が望まれる。

## 第6節 埋葬

発掘面積からみると人骨の出土がきわめて多い。東京大学総合研究博物館保管以外の未鑑定を含めた全体の数を集計すると、全体で埋葬骨70、散乱骨161となり、暫定的な最小個体数は231となる(7-1表)。その数は、当県においては、下太田貝塚(187体)、姥山貝塚(147体)を凌ぎ最多である。貝層の調査率を考慮すると、全体の数は圧倒的なものになるのであろう。同位体分析やDNA分析など、人骨の分析によって解明される内容は多様であり、益々その重要性が高まっている。

### (1) 埋葬人骨の分布

北貝塚では堤状貝層東側の中央寄りに多い可能性があるが、堤状貝層の外側にも分布するなど現状では埋葬域の傾向を捉えることはできない。乳幼児は、埋葬個体は3例のみで散乱骨も少ない。南貝塚では全体にかかるトレンチ調査によってある程度傾向を捉えることができた。堤状貝層の全体に広く分布しているが、東側貝層のほうに多い。貝層の高まりの中心から内側に多く、外側には少ない。現状では墓域の有無は判断できない。北貝塚に比べて乳幼児が多く、土器棺埋納例が主体を占める。



## (2) 29号住居跡の埋葬人骨

住居の廃絶後、柱が残り壁際に土がある程度堆積した状態で遺体が置かれ、混土貝層が薄く床面を覆った後、火が焚かれ海鳥やイノシシの骨が投棄されたといった一連の行為が想定されている。海洋に生息する鳥骨がまとまって出土する例はきわめて稀であり、埋葬に関わる何らかの意図があったものとみられ、また、季節を冬に特定できることも希なケースといえる。竪穴住居の形態が西関東の系譜を引くものであることは第2節で述べた。

## (3) 腰飾をつけた男性リーダー

昭和33(1958)年の明治大学の調査で出土した人骨の腰部から出土したイモガイ製品(芹沢1962)は、中期大型貝塚群の成立期の東京湾東岸に固有のイモガイ製「側面二孔環状製品」とみられる。拠点集落に存在した男性リーダーが佩用した「3種の腰飾」の一つとみられており(西野2012)、この男性成人遺体も、加曾利貝塚の中期集落形成期の男性リーダーであった蓋然性が高く、西関東の強い影響が想定されている(渡辺・西野2006)。

## (4) 埋葬犬

埋葬例は14体以上となり、とても多いといえる。北貝塚と南貝塚でそれぞれ集中する場所があり、人骨の集中とは重ならない。埋葬の場が意識されていた可能性がある。骨折の治癒例は、人とイヌとの深い絆を示すものとして良好な資料といえよう。

# 第7節 東京湾東岸集落群と加曾利貝塚

## 1 様相の変化の概観

第1章第2節4に示した当遺跡周辺の集落群の様相の変化を概括する。

### (1) 阿玉台式末～加曾利E式前半期

北貝塚に環状集落と堤状貝層が形成される。これは、東京湾東岸の2か所に形成された40数か所の大型貝塚＝拠点集落群(7-1図)のうち、都川・村田川貝塚群に含まれるものである。北東側の滑橋貝塚の南半にはもう一つの大型貝塚が、北側の京願台遺跡、加曾利貝塚の南貝塚及び東傾斜面、加曾利貝塚隣接地遺跡の4か所に小規模な集落がつくられた。このように、拠点集落1つないし2つと小規模な集落が群を形成することは、上記の拠点集落群全体に共通するものとみられる。これらの集落群の周囲には、住居などがまったく発見されない空白地帯によって、明確に集落群の単位を把握することが可能である(西野2005a)。加曾利貝塚を中心とした集落群の範囲は南北900mに及び、他の事例に比べるとかなり広いが、やはり周囲に遺構の空白があるので、一群を形成したものと判断できる。

### (2) 加曾利E式後半期

中期環状集落がなくなり、小規模な集落が広域に展開する。加曾利貝塚東傾斜面、南貝塚南西端～西外縁部に比較的多くの住居が集中していた。また、北西の大作北遺跡と南西の南外縁部～加曾利貝塚隣接地遺跡にも住居群がつくられる。以上の南北900m×東西600mの広い台地上に、この時期の遺構が展開するものと推定される。一方で、東側や南側の河川を隔てた隣接地には集落の展開がみられない。

このように、加曾利E式前半に形成された拠点集落の周辺の広域に住居が分布するあり方は、東京湾東岸の大型貝塚群の周辺において数多く認められる。こうした加曾利E式前半期の「環状集落」の「同一地点での反復居住・集中的居住」から、同後半期の環状集落周辺部の「非居住域への分散居住」への移行(加納1994・1995・2000)は、通年定住・集中居住型から、遊動・分散居住型の生産・居住様式への変化と捉えることができる。

ただし、加曽利貝塚を中心とした集落群の特徴として、加曽利E式後半期にも貝層の形成率が高いことと、貝層のなかに多くの魚骨・獣骨等が混じることなど、活発な活動を物語る印象がよい。

### (3) 後期初頭から後期前葉

後期には大型貝塚・拠点集落が復活するが、その成立期については明確でない。少なくとも何割かは後期初頭から住居や貝層を形成するが、後期初頭の後半期(称名寺Ⅱ式期)には遺構・土器とも少なくなるなど複雑な過程をたどるらしい。東京湾東岸に連綿と大型貝塚が分布するようになるのは後期前葉・堀之内1式期である。加曽利貝塚では南貝塚の堤状貝層部に住居が集中し、縁辺にやや広がりをもつ。また北貝塚の堤状貝層部にも存在するが、周囲への展開は今のところ不明確である。

### (4) 後期中葉から晩期前半

後期中葉には貝塚数が半減するが、中葉以降に継続する場合、貝層の形成は低調に向かい、骨が目立つようになる傾向がある。その多くは晩期前半まで継続する。

### (5) 加曽利貝塚の集落の特質

以上のように、①加曽利E式前半の大型貝塚群形成、②加曽利E式後半の分散居住型の集落群形成、③後期初頭から後期前葉の後期大型貝塚形成という3度の大きな変革期を見出すことができる。加曽利貝塚は、その間を通じて連綿と居住地であり続けた。大型貝塚形成期の間にあたる②の時期にも、周縁部の広域に多数の居住跡が認められ、貝層の内容から活発な生産活動の様子を伺うことができる。このようなあり方は、今のところ東京湾東岸の中でも唯一の事例ということができるであろう。

また、後期大型貝塚の大半が、後期前葉に貝層形成のピークをもち、後期中葉以降は低調となる傾向にあるのに対し、加曽利貝塚ではむしろ中葉に貝層形成のピークをもち、集落としては晩期にも一定の規模を保つようである。

このような傾向について考える上で参考となるのは、後期中葉から地域の中心となっていく古鬼怒湾水系との関係である。当遺跡は古鬼怒湾の谷に近接しており、他の時代にも印旛沼水系との結びつきがよい地域ということができる。古代には、古東海道を通じて二つの水系を結ぶ交通の要衝であり、糟瓜郷の中心であったらしい(第1章第2節1)。

縄文後期中葉以降、印旛沼南部低地付近の大規模集落群には、東京湾産の貝類が活発に運ばれた(高橋・林田・小林 2001)。加曽利貝塚から印旛沼水系に至る地域には、佐倉市草刈堀込遺跡や四街道市前広貝塚という大規模集落が存在する。東京湾東岸の集落のなかで、後期中葉以降も貝層形成が活発であったことの大きな要因は、この点にあったものと考えられる。

## 2 動植物資源の利用

当地域におけるこの時期の動植物資源の利用については、1980年以降に発掘された多くの貝塚出土資料の分析によって次第に明らかにされてきた。都川・村田川貝塚群は資料やデータがもっとも豊富で、7-2表のように集落間の比較も行われている。詳細な比較を行おうとすると、様々な障害があつてなお今後の課題は多く、今回の分析成果も多くの興味深い事実が知られた一方で、比較可能なデータとはなっていない。ここでは、既存の大まかな研究成果(西野 2004)によって当地域の動植物資源利用の特徴を取り上げ、今後の課題を明確にする補助としたい。

大型貝塚形成期の食は、ドングリやイモ類、イノシシ・シカを中心とした森林資源、小魚・イボキサゴ・ハマグリを中心とした海産資源など、様々な食材をバランスよく活かしていたものであった。巨大な貝層のイメージほど生業や食事は魚貝類に偏っていなかったという点までは、生産用具の組成と人骨の同位体

7-3 表 都川・村田川貝塚群における資源利用の比較(樋泉 2001 を改変)

	矢作貝塚	台門貝塚	加曾利貝塚	多都田貝塚	誉田高田貝塚	木戸作貝塚	大膳野南貝塚	
分析試料の時期	後期前葉	後期前葉	後期前葉～中葉	後期中葉	後期中葉	後期前葉	後期前葉	
遺跡の位置	都川河口	都川下流支谷奥	都川中流支谷奥	都川中流支谷奥	都川谷奥	村田川下流支谷奥	村田川下流支谷奥	
海岸からの直線距離	約1km	約2km	約4km	約6km	約6km	約2km	約4km	
谷沿い距離	約1km	約2km	約6.5km	約7.5km	約12km	約2.5km	約5km	
貝層の規模	中	大	大	大	中	中	中	
主要動物質食料の構成	貝+海産魚+陸獣(魚多)	貝+海産魚(+陸獣)	貝+海産魚+陸獣	貝+海産魚+陸獣(大形魚稀)	貝+陸獣+淡水魚	貝+海産魚+陸獣(陸獣、大型魚少)	貝+海産魚+陸獣(陸獣、大型魚少)	
貝種組成	海産 イボキサゴ、ハマグリ主体	イボキサゴ、ハマグリ主体	イボキサゴ、ハマグリ大半、アサリ多	イボキサゴ、ハマグリ大半	イボキサゴ、ハマグリ大半	イボキサゴ、ハマグリ大半	イボキサゴ、ハマグリ大半	
汽水産	多い	ふつう	ふつう	なし	ごく稀	少	ごく稀	
ハマグリ採取季節	周年(春中心)	—	周年(夏と冬やや多い)	—	周年(夏中心?)	周年(秋～冬中心)	周年(秋～冬中心)	
魚種組成	海産大型 海産小型 淡水産	クロダイ、マダイ主体。スズキ多様な種が混在	(詳細不明)	クロダイ大半	稀 少	稀 少	クロダイ主体、スズキ・マダイ多 多様な種が混在	クロダイ主体、スズキ・マダイ多 多様な種が混在
鳥獣類組成	陸獣類 鳥類 ウミガメ	シカ・イノシシ主体(シカ多) カモ類主体、キジ多 あり	(詳細不明)	シカ・イノシシ主体 キジ主体、カモ類多(加工品)	シカ・イノシシ主体 稀	シカ・イノシシ主体(シカ多) ?	シカ・イノシシ主体(シカ多) ?	シカ・イノシシ主体(シカ多) ?
生産用具	狩猟具 漁撈具 植物採集・加工具	石鏃 釣針・刺突具多、 錘	—	石鏃(少) 刺突具、錘	石鏃(少) 錘(稀)	石鏃(少) 刺突具、錘	なし	なし
生産用具組成の特徴	漁撈具(刺突具・釣針)多	(詳細不明)	植物採集・加工具大半	植物採集・加工具大半	植物採集・加工具大半	植物採集・加工具大半	植物採集・加工具大半	

分析による食性の復元研究によって裏付けられている。海産資源の利用が比較的低調な晩期人骨の食性は陸産資源に偏る。

大型貝塚の形成期を大きく中期と後期とすると、その大きな違いは以下の点にある。中期は、動物遺体や生産用具の内容がどの集落も似通っており、資源利用のあり方の斉一性が高かった。これに対し、後期は集落間の差が大きく、一つの水系においても沿岸から内陸にかけて様々な違いを持っていることである。都川・村田川水系の後期貝塚群をみると、海岸からある程度の範囲内にある集落では海産魚が選択的に利用されるが、海岸から遠ざかるにつれて利用頻度や魚種の多様性が低くなり、もっとも遠い誉田高田貝塚では淡水魚主体であった。一方で、海産貝類は誉田高田貝塚のような内陸部の集落であっても大量に運び込まれている。加曾利貝塚は、沿岸部の集落と内陸部の集落の中間的なあり方である。こうしたあり方から、集落間での分業・協業や、水系を超えた大きなネットワーク社会の構築が想定される。そうした社会の実態を知る上で、都川・村田川貝塚群が内包する豊富な情報は、きわめて重要なものとなるであろう。

## 第8節 今後の課題

前節までに、当遺跡のもつ学術的な価値を物語る発掘成果を挙げたが、今回の整理作業を通じて新たに見出した資料はそれほど多くない。すでに資料からは見えていたはずの事実をとりまとめ、当遺跡の価値を改めて見直して言葉にし、それを裏付ける資料を提示することが事業の眼目となった。加曾利貝塚の価値がゆるぎないものであることは間違いなく、今回の作業を通じてその一部を確認できたと思われる。しかし、本来のもつ価値を知るためには余りにも不明な点が多く、価値を検証し言葉にする作業は道半ばである。以下に、今後の課題を簡単にとりまとめた。以下の諸点に留意して、明確な方針・計画のもとに学

術発掘を含めた分析・研究の継続を検討していきたい。

## 1 地形測量と過去の調査地点の明確化

加曾利貝塚の発掘調査の大半は明治・大正・昭和に行われたもので、特に北貝塚・南貝塚の範囲の調査地点は記録の不足や不整合により、調査区の位置はすべて不明確であって、本書作成の上でも大きな制約となった。これまでの調査成果を今後に生かすためにも、今日的な測量精度による旧調査区の確認は不可欠である。また堤状貝層の高まりが、現在の遺跡を景観的に特徴付けているのみならず、縄文時代の集落のあり方を考える上でも、形成されていく過程を含めて極めて重要であることは疑えない。しかし現在用いられている1m等高線の地形図では、特に南貝塚の堤状地形が充分表現されておらず、本書の記述の上でも苦慮した部分である。何らかの災害によって景観の変化が生じる可能性も皆無ではなく、現在の微地形を表現したより精度の高い地形測量図の作成と、恒久的な座標基準点・水準点の設置が急務である。旧調査地点も新たな測量図の基で確認してこそ意味を持つと強調しておく。

## 2 旧調査地点の再調査と計画的学術発掘の実施

旧調査地点では、調査区の位置だけでなく検出した遺構についても記録の不整合を認める点が多く、10次調査第2調査地点を参考にすれば旧調査区の壁面の遺存は期待できないので、調査区の位置の確定には底面の露出が不可欠と想定されるので、再調査を行って個別の遺構も含めて記録し直す必要がある。これまでの調査の記録の不備・不整合は、特に2次調査において幅の狭いトレンチ調査で行った故の観察や記録の上での制約にも大きな要因があったと思われるから、旧調査区のみならず再調査や狭小な調査区の設定は、同様の失敗を繰り返したずらに遺跡を破壊することにもなりかねない。こうした反省をふまえ、旧発掘区の想定地点を含めた数10m四方程度の学術調査区域を設定し、平面的発掘によって旧調査区と遺構の位置を確定するとともに、堆積状況の確認と時期認定を行い、既調査遺構の位置・層位的前後関係を検証し、あわせて帰属する時期の確定を図るべきである。推測できる加曾利貝塚の集落の変遷からすれば、南貝塚の晩期の遺構と包含層・貝層が存在する範囲を手始めに、層位的には上層から下層へ、時間的には新から古へと遡るように、学術発掘を計画的に実施することで、時期ごとの集落構造の確定を図るべきであろう。

## 3 貝層調査・分析方法の確立

北貝塚と南貝塚の堤状貝層の堆積構造について、阿部(2005)は「北貝塚が竪穴住居の廃絶後に貝塚が形成され、やがて貝層がマウンド状の高まりを形成するのに対して、南貝塚では貝層中に土砂の敷設や、貝層の削平がおこなわれた面に炉跡が形成され、貝層の累積だけではなく、同じ場所に重複して集落遺構が形成されている」として、「両貝塚の違いは単に時期の違いだけではなく、遺跡形成の構造的な差異が反映したものである」と主張している。本書を通じてこの点の追求が充分行えなかったことは遺憾とする点であるが、課題として明記して今後の展開を期待したい。

堆積構造の比較作業の前提として、堤状貝層そのものに対する調査と分析を有効かつ効率的に進めるために、ひとつひとつの堆積層をどのように把握するべきか検討すると共に、現在露呈・展示されている北貝塚・南貝塚それぞれの貝層断面の再調査(分層)も、試みる価値は高いだろう。また阿部の強調している南貝塚貝層中の「住居と考えられる遺構」の範囲と構造を、平面的にも把握して集落構造に組み込む方法を、貝層に含まれる鳥獣魚骨や貝類の分析と両立を計りつつ、構築していかなければならない。各種の自然科

学分析も、堆積構造と時間的な位置付けの明確な資料によって、より有効な活用を図るべきである。

#### 4 集落構造や遺跡の形成過程の解明

集落の構造を示す貝層・住居跡・土坑等の遺構の分布範囲や時期的な変化などは、未だ不明な点が多い。今後の調査によって解明すべきことをいくつか挙げておく。

- ・各時期の集落構造と範囲
- ・北貝塚・南貝塚の貝層の形成過程
- ・堤状貝層内の窪地・包含層・遺構の形成と年代
- ・東傾斜面下部の遺構・包含層の広がり と低湿地への連続の確認
- ・低湿地層の調査による低地の利用の解明と古環境復原

既報告では、貝層や出土遺物にできる限り年代を与える方針であった。大半は発掘中の所見によるものであり、報告書に根拠が示されたものはわずかである。整理作業時の詳細な検討によって調査時点の所見が覆ることは普通であるので、今日的には報告書で証拠を示し得ない情報は研究に耐えない。今回の記録類と出土資料の見直しによって年代を与えられる遺構・遺物はごく乏しいものとなった。詳細な時期を加味した研究は、今後の発掘調査と整理作業が必要である。また、出土状況の詳細な観察と各種分析によって、未解明の部分を一とつひとつ検討・検証していく必要がある。

#### 5 生産活動や社会・経済の解明

縄文時代中期から晩期にかけて、加曽利貝塚には様々な資源が持ち込まれていることが本書において改めて裏付けられた。下総台地に存在しない各種の石材が多数持ち込まれていることは、干貝と石材を交換した証拠として、大型貝塚＝干貝加工場説を裏付けるものとされてきた。その後、県内では数多くの縄文集落の発掘が進むなかで、大規模な貝層を形成する遺跡とそうでない遺跡の差は少なく、中期に房総にもたらされた大量の黒曜石の大半が神津島産であることも明らかとなっており、単純な“海と山の交換”といった図式は成り立たない。さらに、中期大型貝塚群に隣接して、貝層を形成しない集落が群を形成していることも判明しており、海産資源の流通に関しては近隣との関係も無視できない。こうした点から、石器石材の研究には地域内の集落間の比較検討も必要であるのが今日の趨勢であり、同時に石材以外の資源でも遠隔地と近接地を共に視野に入れて流通の解明を図るべきであろう。

縄文時代の生産活動や社会・経済を解明する上で、加曽利貝塚の資産は膨大で計り知れないほど豊かであると言える。

#### 6 新たな調査・研究に向けて

貝塚の発掘調査、整理作業、各種分析は、通常の遺跡に増して多くの期間と費用、専門的な知識・経験を持つ人材が必要である。調査が精緻であるほど、整理作業の負担は大きくなる。計画的に整理・報告を進めて、その成果を発掘調査の目的や方法に活かしていけるような計画と体制の構築が求められる。県内では、現在も毎年数多くの貝層の発掘・整理が行われており、未分析の資料が年々増加している。加曽利貝塚の出土資料と発掘成果はすばらしいが、それが充分活かされてこなかった。この反省に立ち、新たな発掘は以上の点に配慮したものとしなければならない。

## 参考文献

- 加納実 1994 「加曾利 EIII・IV式土器の系統分析」 貝塚博物館紀要 21、千葉市立加曾利貝塚博物館
- 加納実 1995 「下総台地における加曾利 EIII式期の諸問題—集落の成立に関する予察を中心に—」 研究紀要 16、千葉県文化財センター
- 加納実 2000 「集合的居住の崩壊と再編成—縄文中・後期集落への接近方法—」 先史考古学論集 9
- 高橋誠・林田利之・小林園子 2001 「縄文集落の領域と「縄文流通網」の継承—佐倉市坂戸草刈堀込遺跡発見の晩期貝層から—」 研究紀要 2
- 西野雅人 2002 「縄文時代中・後期のヘラ状貝製品」 往還する考古学、近江貝塚研究会
- 渡辺新・西野雅人 2006 「骨角貝製「腰飾」—篋状鯨類下顎骨製品・環状イモガイ製品—」 千葉縄文研究 1
- 渡辺新 2006 「—市川市姥山貝塚接續溝第1号堅穴—5人の死体検案」 千葉縄文研究 1
- 渡辺新 2012 「蛇の標章—Union of the Snake—」 千葉縄文研究 5